

# 「森と水と命の惑星」国際会議

## ～地域と世界の心と魂を詠む～



塾長 梅内 拓生

(学んで自分で考える) 世界にはキリスト教、ヒンズー教、仏教、儒教、道教、イスラム教、などいろいろな宗教とつながった思想があり、これらが世界の政治、経済、文化の運動と深い関係を持っています。

科学と技術の発展によって、宇宙と地球の構造と運動に関する情報は豊富にもたらされておられます。21世紀を文明の姿という視点から展望すると、宇宙と地球の物理学的運動と文明の運動とが密接に関係している姿が浮かんでくる。地球と惑星の衝突、地殻の運動と地震、海流の運動と気候変動、文明活動による砂漠化、大気汚染、放射能汚染、気象変動、人口増加、戦争やテロ、などが枚挙に限りがありません。このような自然と社会をどのように認識し、そして対応すべきか、この難問への定まった回答はありません。この現

象をしっかりと捉えて、事実として学んで、自分で考えて対応することが大切なのです。2500年も前に中国の孔子は論語で「学びて思わざれば則(すなわち)罔(くわ)し、思ひて学ばざれば則(すなわち)殆(あや)うし」と述べている。産経新聞3月8日の第一面の「賢者に学ぶ哲学者 適名 収 答 えが出ない問題」で「よい問いとは、答えが容易に見つからず、かつ答えが存在する(と思われる)問いである。簡単に結論が出るような問いは「問」としての価値はない」と述べて「評論家の小林秀雄(1902～83年)は人間的な複雑な問題に関する、人間の深刻な判断というものは屢々(しばしば)一見曖昧な姿をとるものだ(断想)」と述べている。歴史の中で、人間はその歴史で遭遇した問題に対応しながら生きてきたのであり、定

まった答えはないのである。

小林秀雄はロシアの作家ドストエフスキーの小説に登場する精神に闇をかかえる人物にふれながら、ドストエフスキーが小説という体裁をとって繰り返し取り上げたのは「ロシアとはなにか?」という根源的な問いだった。問い続けなければ問題もある。さらに、「問いがそのまま答えになるほど執拗に問うひともあり、問う能力がないから答えを待っている人もあるのだ。解決を欲しがる精神が、奴隷根性の一変種であるのが大体普通なのである」と述べている。

この文脈から東日本大震災の復興を目指して努力している気仙地方を眺めると、気仙地方の歴史と文化には、ここで述べている立ち上がるという明確な思想や行動は浮かんできません。しかし、東日本大震災の時に浮かんできた忍耐力の強さは、これとつながる可能性は梅下村塾(8)に述べて来たように強いと思われる。気仙地方の根っこに潜んでいる(学んで自分で考える)力を掘り起こし、新しく創りだすことを目指そうではありませんか。

生命誌とiPS細胞) JT生命誌研究館館長の中村佳子博士は地球誕生46億年の歴史の中で、生命の誕生は約40億年前、数億年経って生命は陸地に進出してきたと述べている。そして、人類の歴史はここ数百万年前に始まる。全ての生物はDNAという遺伝情報物質を共通に持っている。人間の生命も歴史も文化も、この生物に共通なDNAと深い関係を持っている。文字を人間が持つてから数千年、この文字を持ったことが、文明を構築した基になる。生命の長い長い歴史から見ると、文字文明は極めて若いものである。命を授かったものは死ぬ運命にある。これをどのように受け止めるべきか、生と死の問題は、文明を築いた人間に突き刺さっている深刻な問題である。そこから、宗教が生まれ、芸術が生まれ、科学が生まれてきた。iPS細胞の研究で京都大学の山中伸弥教授は再生医療の開発を行ったという貢献でノーベル賞を授与された。ではいったい、生命誌とiPS細胞の発見は何がどうつながっているのだろうか。こ

れは、21世紀文明の新しい倫理が要求されていることです。

東日本大震災は地震と津波という地球運動と文明の関係の認識を新たに要求してきました。そこには被災地東北地方の人々の秩序ある忍耐力の姿に、世界の人々は感動したのである。この東北地方の忍耐力をどのように21世紀文明の倫理に組み入れるべきか、これが世界の課題なのです。東北地方の歴史と文化には我慢の力だけでなく、2000年以上の大和朝廷が受け継いで来た歴史と文化の中で植えつけられた長いものには巻かれるという自己卑下と自己防衛がまじった感情があります。

梅下村塾(8)で述べましたが、第二次世界大戦で徴兵されて苦勞した人々が、短歌という伝統文学を奴隷文学と言っている人々もおります。関東大震災の東京の復興を行った後藤新平は医学を修め、そして国のための政治を行いました。岩手県の水沢市の生まれです。この政治の魂を現代の同じ郷土出身の政治家は忘れていないと思つた。残念です。気仙の草の根の人々の「けっばり」に期待しております。

(東海新報記事から)

3月5日(火)の第4面に小さい記事が載っていた。「不登校・ひきこもりの勉強といじめ相談 16日、猪川公民館」「不登校・引きこもりの勉強会といじめ相談の会(気仙地区父母会主催)は、16日(土)に大船渡市猪川地区公民館で開かれる。子どもの不登校などに悩む父母らの参加を募っている」と掲載されている。

大震災後のいろいろな悩み事の相談に地域が立ち上がっているのである。新聞はもっと積極的にこのような地域の教育の問題を取り上げるべきであると思う。

毎日新聞の3月9日(土)の第3面に「再生への提言 東日本 2年 東北魂で立ち上げ ザーナリスト 木の たけじ(96)」が掲載されている。「梅下村塾」で幾度も述べられてきたように、中央の支配から独立し、世界の文明につながる復興を目指せといっている。そのためにもジャーナリズムが生き返って、積極的に問題提起していくべきだと述べている。東海新報はまさに、この役割を果たすことを肝に命ずべきであると思う。